

暴かれた「どん底」——失われた労働者階級としての「チャヴ」表象の行方

Chavs in the Exposed Abyss:

A Representation of “the Lost Working Class” in Fiction

清川 祥恵

Sachie KIYOKAWA

I はじめに

マシュー・ヴォーン (Matthew Vaughn) 監督による 2014 年の映画『キングスマン』 (*Kingsman: The Secret Service*) が公開されたのち、主人公の少年エグジー (Eggsy) について、単にストリート・キッドではなく「チャヴ」 (chav) であるとの呼称がしばしば使用されてきた¹。「チャヴ」は、特定のファッションによって特徴付けられる若者達を指す概念として、2000 年代半ばから注目をあつめている。たしかに、明らかにこのキャラクターが身につけているストリート系の服装は、国家諜報機関「キングズマン」の紳士の面々が身につけるスーツと対比されており、エグジーがエージェントとして加入するさいの秘密基地への入り口がテイラー・ショップの試着室となっていることから、本作ではある種の「立身出世」として、「チャヴ」から抜け出し、「紳士」 (gentleman) となる過程が服装の変化によって表象されていることは容易に見て取れる。実際に作中ではエグジー自身がこれを、キングスマンのひとりであるハリー (Harry またはガウェイン Gawain) からアメリカ映画『プリティ・ウーマン』 (*Pretty Woman*, 1990) のようだと喩えられたときはピンときていなかったが、具体的説明を聞いた後に『マイ・フェア・レディ』 (*My Fair Lady*, 1964) ²と同じだと端的に理解するシーンもある。

『マイ・フェア・レディ』は、その原作がジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) の戯曲『ピュグマリオン』 (*Pygmalion*, 1913) であるということがよく知られている。本作が、『ピュグマリオン』あるいは『マイ・フェア・レディ』を摸しているというのならば、背広の着用によって底辺から「身を立てる」という物語のプロットと、それによって打ち立てられるヴィクトリア時代にもはやされた「紳士」のイメージが、21 世紀の今日において、19 世紀末のそれとどの程度つながりを持ち、反面で異なって表現されているのだろうか。ヴィクトリア期は市場競争によって生じた社会のひずみが顕在化した時代として知られているが、これにより、そのマーケットがさらに拡大

¹ 次の記事中で“chav-y street kid”と形容されている。Lawson, Richard. “Review: Kingsman Is Crazy Violent, and Endlessly Entertaining.” *HWD*, Vanity Fair, 12 Feb. 2015, www.vanityfair.com/hollywood/2015/02/kingsman-the-secret-service-review. Accessed 13 Feb. 2018.

² エグジーの言及はタイトルのみなので、*My Fair Lady*はこの映画版 (ジョージ・キューカー George Cukor 監督、オードリー・ヘプバーン Audrey Hepburn およびレックス・ハリソン Rex Harrison 主演) またはその元となったミュージカル公演のいずれかを指していると考えられる。

している今、社会的悪に対峙する主人公の「立身」が意味する内容を分析することで、「労働者階級」の表象の一系譜を考える一助としたい。

II 新たな「底辺」としての「チャヴ」

すでに述べたように、2000年代半ばにひろく認知されるようになった「チャヴ」という概念については、英国では『キングスマン』の公開に先んじて2年、オーウェン・ジョーンズ (Owen Jones) による意欲的な手引き書が出版された。本邦でも2017年に翻訳され、『チャヴ——弱者を敵視する社会』(依田卓巳訳、海と月社)として出版されたところであり、その定義自体にたいする議論の端も開かれたばかりといえる。『オックスフォード英語大辞典』(Oxford English Dictionary, OED)への収録は2006年の第3版が初めてで、以降、多少の変更が加わり、現バージョンでの語義は次のとおりである。

生意気かつ粗野なふるまいと、デザイナーブランドの衣服(とくにスポーツウェア)の着用によって特徴付けられる若者で、通常、低い社会的地位とつながりがある (usually with connections of a low social status)。(下線引用者)³

ジョーンズが著書で問題にしたのは、まさにここで下線を引いた「低い社会的地位」の人々の表象とその受容、それによって再生産される階級闘争についてである。とくにリアリティ・ショーなどで表象される「チャヴ」を「貶める」ことが当然の行為として視聴者によって行なわれていることを、ジョーンズは「チャヴテインメント」(chavtainment)と呼んで批判している(157-63頁)。

ひとつ注意しておきたいのは、ジョーンズの著書の原題が、*Chavs: The Demonization of the Working Class*であることである。「労働者階級の悪魔化」とでも直訳すれば、たんに「弱者」を「敵視する」という邦題ではカバーしきれない角度からの切り口も示唆されていることがわかる。つまり、19世紀末に顕在化した最下層としての労働者階級が、20世紀を経てもなお、依然として(というよりはむしろさらに悪い形で)「弱者」として存在し、21世紀の英国社会のヘイト(憎悪)を一身に引き受けているという事実である。

ジョーンズは、20世紀より前の下層労働者階級へのまなざしについては、本題ではないので要所要所でチャールズ・ディケンズら(Charles Dickens, 1812-70)に言及する程度(137頁)にとどめているが、チャヴは、こうしたヘイトのターゲットであるという意味で、19世紀末の社会経済規模拡大による負の産物—イーストエンド(East End)の貧民達と地続きの存在である。彼らは双方ともに「正しい」英語を話すことができず、社会から爪弾きにされている「恐ろしい」存在だ。だが、ひとつ違う点を挙げるとすれば、イーストエンドに生きていた、社会的底辺に属すると見なされたかつての人々は、圧倒的に「未知」によって包みかくされた存在であったという点である。19世紀末のロンドンにおいては、ジャック・ロンドン(Jack London, 1876-1916)が著書『どん底の生活』(*The People of the Abyss*, 1903)で描き出したような格差が、くさい物にふたをするかのようなかたちで放置されていたことがよく知られている。同書の冒頭で語られているとおり、イースト・エンドのスラムに暮らす彼ら/彼女らは、一般的な興味や娯楽の対象になることすらない存在であった。「最暗黒のアフリカ」

³ "chavvy, n.", "chav, n." *Oxford English Dictionary Online*. Web. Accessed 13 February 2018.

(Darkest Africa) や「最奥地チベット」(Innermost Thibet) への案内をもあつかうトマス・クック社でさえも無視する場所が、イーストエンドだったのである(2-3)。「どん底」という地獄(the Abyss)、すなわち地下社会(“the under-world”, ix)に生きる人々を gutter folk (213)とも表現していることから、とにかく社会から打ち棄てられた、深淵に沈んだ見えない存在としての貧民という構図が強調されている⁴。

一方、チャヴ・ヘイトは「二一世紀に合わせてイメージチェンジした昔ながらの上流気どり(スノッパリー)」である(172頁)とジョーンズが指摘するように、明らかに彼ら/彼女らの「分不相応さ」を揶揄するために、その「ブランドもの」のファッションに言及してチャヴを批難するという態度が見いだされる。原著にも日本語版にも表紙写真として採用されている老舗ブランド、バーバリー

(Burberry)のチェックのキャップは象徴的である⁵。前述したように、メディアが積極的に「暴かれた」チャヴの「実像」を取りあつかい、それに対して無遠慮に、むしろ公然と認められたものとしてヘイトが投げつけられるのである。したがって、『キングズマン』で自らの演じたキャラクターを「チャヴ」と呼ばれたことについてウェールズ出身の俳優タロン・エジャトン(Taron Egerton)は、学生による新聞のインタビューで次のように答え、嫌悪感を表明している。

「それはちょっと侮辱的(a bit offensive)ですよね。本当にイヤな言葉(ugly word)です。私はこれは本当に、本当に、本当に厳密ではない概念化(lazy generalisation)だと思います」⁶

かつての労働者階級、とりわけ最貧層は、社会から脱落して「どん底」へと堕ちていった憐れな人々とみなされ、19世紀の紳士たちにおいてはもっぱら彼らの「博愛」の対象であった。しかしジョーンズの、「階級闘争」の落とし子としてのチャヴ(51頁)が、労働者階級を無力化し、中流階級の「残りかす」へと矮小化したという指摘(177頁)を見れば、「チャヴ」はたんに困窮している憐れな人々な

⁴ ジョゼフ・マクローリン(Joseph McLaughlin)は著書のなかで、コナン・ドイル(Sir Arthur Conan Doyle, 1859-1930)からT・S・エリオット(T. S. Eliot, 1888-1965)までの、都市文化の中の貧民の描き方を通して、「都会のジャングル」(Urban Jungle)となったヴィクトリア時代後期のロンドンが、大英帝国の縮図となり、エスノグラフィーの対象として記録された側面を明らかにしている。マクローリンはジャック・ロンドンのイースト・エンド行きが探検家としての側面も持っていたことを指摘しつつ、『どん底の人びと』のこの冒頭描写については彼以前にそこを訪れた人たちの記録——たとえばエンゲルス(Friedrich Engels, 1820-95)の『イングランド労働者階級の状態』(*The Condition of the Working Class in England in 1844*)——からの教えによって「構築された」ものだったとしている(105)。

⁵ 2014年にバーバリーが「チャヴ」から「シック」(上品さ)へと回帰しようとしているというような報道も見られるほど、バーバリーはチャヴの代名詞となっていた。Catherine Ostler for the Daily Mail. “As Romeo Beckham stars in their new ad, how Burberry went from chic to chav to chic again.” *Daily Mail Online*, Associated Newspapers, 5 Nov. 2014, www.dailymail.co.uk/femail/article-2822546/As-Romeo-Beckham-stars-new-ad-Burberry-went-chic-chav-chic-again.html. Accessed 13 February 2018.

⁶ Walter, Barnaby. “Kingsman actor Taron Egerton says calling people a ‘chav’ is offensive and is equivalent to homophobia.” *The National Student*, The Edge: the University of Southampton’s entertainment magazine, 30 Jan. 2015, www.thenationalstudent.com/Film/2015-01-30/Kingsman_actor_Taron_Egerton_says_calling_people_a_chav_is_offensive_and_is_equivalent_to_homophobia.html. Accessed 13 February 2018.

のではなく、所持金を分不相応なブランド品に費やす社会不適格者といったニュアンスがつきまとう。モラルの欠如や、自己責任論が、「最貧層へと墮ちる」原因ではなくて、あらゆる憎悪の後付けの理由として利用される。ジョーンズの論でいえば、とくに「リベラル」なチャヴ・ヘイターへの言及がこれを立証するものとなっている（145頁）。社会に公認された憎悪のゴミ箱として、厳密性を欠く「チャヴ」が利用されるのである。

III ワーキング・フィクションとしての『キングスマン』におけるチャヴ表象

『キングズマン』においてはこうした「チャヴ」の少年が、自己を律する訓練を受けて、最終的には世界を救うヒーローとなるわけだが、既存の権威の転倒としてキングズマンの一員の裏切りが描写されているとはいえ、やはり最終的には背広を颯爽と着こなすことこそが「成功」とも取れるプロットとなっている。最後のパブでのシーンは、まさに序盤にハリーがエグジーに格闘を見せる構図が反復されている。エグジーのファッションはここに至って、レジメンタルのネクタイまでそっくり同じものになっているし、台詞や動きも踏襲され、ハリーという紳士に救われたエグジーが、今度は自身が紳士となって母親を「チャヴ」から脱出させるという意図での描写なのであろう。そこだけ見れば、本作品は単純な立身出世ものである。しかし、ここでの母親との会話の内容が「ヒーローになった」ことではなく「新たな職を得た」ことのメリットを語っていることを考えると、いわゆるワーキング・フィクションの一種としての性質も読み込むことができる⁷。

ここで、『キングスマン』の監督・脚本・制作をつとめたマシュー・ヴォーンの言を少し見ておきたい。ヴォーンは、2010年に同じくコミックが原作の『キック・アス』（*Kick-Ass*）を手がけていることがよく知られている。『キック・アス』はスーパーヒーローに憧れる少年デイヴ（Dave）の物語で、ビルの屋上から隣のビルに飛び移ろうとする訓練のような、スーパーヒーローとなるまでの軽妙な試行錯誤の過程はサム・ライミが監督した『スパイダーマン』（*Spider-Man*, 2002）に似ており、既存のヒーロー映画のパロディとして見ることができる。この映画と『キングスマン』には、共通する特徴として、大音量のBGMにのせて行なうスプラッタの描写がある。ヴォーンは2017年の9月に、第2作『キングスマン：ゴールデン・サークル』（*Kingsman: The Golden Circle*）のプロモーションのためのインタビューに答え、次のように語っている。

「私が大ファンである〔2005年、2008年、2012年に制作された『バットマン』*Batman*のリポートである『ダークナイト』三部作 *Dark Knight Trilogy* の監督クリストファー・] ノーランがはじめて名を上げたとき、または〔『キングスマン』がしばしば比較される007シリーズの〕『カジノ・ロワイヤル』（*Casino Royale*, 2006）が世に出たとき、世界は良い状態だった（in a good place）。芸術は普通、世界で起こっていることに反対するものだ。世界が良い状態であるときは、芸術はより厳粛で陰鬱（more serious and downbeat）なものとなる。今—つまりこれらの映画が作られてから10年後—のように、世界が悪い（bad）状態であるときは、逆となる。あなた

⁷ もちろん、職としてのエージェント活動がリアリティを以て描かれているわけではないという点では、厳密には「労働小説」とはいえないことは自明なのであるが、後述するようにグローバル・マーケットイズムに翻弄されながら働く労働者の姿を描いているものと読むならば、という限定の下である。

方は昂揚させられる必要がある。もう暗闇はおしまいだ。うんざりだ。(You need to be uplifted. We've done darkness now. It's become boring.)」⁸

つまりヴォーンによれば、2005年ごろ—まさに「チャヴ」の概念が注目されはじめた時期であるが—は、世界は「良い」状態であって、それゆえに、自らの使命に苦悩するバットマンという深刻なテーマが描かれた。しかしながら、今の悪い状況にあっては、使命や責任といったシリアスな葛藤よりも、とにかく爽快な、残虐さを厭わないアクションが必要なのだということである。

『キック・アス』にしる『キングスマン』にしる、主人公の行動は、たしかに大義というよりは、自らをとりまく、社会に対して閉じられたミクロな環境を改善したいという強い要求に起因するもののように見える⁹。その意味では、エグジーが背広を身につけることで手に入れたのは、社会的「成功」そのものというよりも、社会の一員としての自らの生活の「安定」である。通常、恵まれない境遇を出発点とする主人公達の英雄譚では、結局は血筋の正統性によってその社会的地位を保証されるケースが頻出しがちである¹⁰。エグジー自身も実のところ、キングズマンとして殉職したエージェントの息子ではあるのだが、彼がエージェントとなる決め手は、ナイトクラブへの潜入から始まったミッションで、キングズマンにかんする機密を命を懸けて守る最終試験に合格したからである。その意味では、ナイトクラブは「チャヴ」の享楽主義を暗示するもので、エグジーはそれにおぼれることなく、組織のなかで責任を負う主人公へと変化したと考えられよう。

『キングスマン』におけるヴィランは、永遠に通話とインターネット回線の使用が無料となるSIMカードを配布し、群衆を洗脳して互いに殺戮し合わせることで過密な人口を間引こうとするヴァレンタイン (Valentine) という人物である。「チャヴ」出身の紳士となった主人公は、自らの母親もふくめ、盲目的にこれに飛びついてしまった人々すべてを救うヒーローとなった。こうした無料至上主義という、労働の無価値化を促進する自由市場経済との戦いと考えると、これはまさしくヴィクトリア時代のワーキング・フィクションのような、労働の価値の問題を提起する作品の亜種である。まさに「チャヴ」が *OED* に収録された2006年に、キャロライン・レスジャック (Carolyn Lesjak) による研究書『ワーキング・フィクション—ヴィクトリア時代の小説の系譜学』 (*Working Fictions: A Genealogy of the Victorian Novel*) が上梓され、社会において労働問題が実体化するなかでおこった、19世紀末

⁸ Shepherd, Jack. "Matthew Vaughn interview: 'When the world's bad, people need to be uplifted!'" *The Independent*, Independent Digital News and Media, 25 Sept. 2017, www.independent.co.uk/arts-entertainment/films/features/matthew-vaughn-kingsman-2-the-golden-circle-fantastic-four-guy-ritchie-layer-cake-a7966731.html. Accessed 13 February 2018.

⁹ 『キック・アス』でデイヴはスーパーヒーローへの憧れから大きな善をなそうと考えてはいるが、巨悪に立ちむかうのは、恋の相手のために乗り込んだ先で別の家庭の個人的復讐劇に巻き込まれた結果にすぎない。『キングズマン』は言うまでもなく、エグジーの日常—シングルペアレント家庭で仕事もなく、母のボーイフレンドからのDVに苦しみ、犯罪に手を染める日々—からの脱出である。

¹⁰ 1990年代にディケンズ的な孤児の物語を彷彿とさせるプロットで登場したJ・K・ローリング (J. K. Rowling, 1965-) の『ハリー・ポッター』 (*Harry Potter*) シリーズにしても、2017年のガイ・リッチー (Guy Ritchie) 監督版『キング・アーサー』 (*King Arthur: Legend of the Sword*) にしても、出自こそが成長や成功のもっとも大きな鍵であった。とくにストリート育ちのアーサー王が話題になった (ものの、興行的には失敗に終わった) 後者は、そうした成り上がりを本人の腕っ節のみでおこなっているように見えて、聖剣を使いこなす能力自体は実質父から継承されるもので、父の死のトラウマから目をそらす (look away) かどうかが「人と王の違い」 (the difference between man and the king) であるとする台詞がある。

の労働小説における労働と歓びの分離についての考察がなされたが、当時の「労働」の形態の変化—すなわち労働が苦役となるような状態—は今日、さらに悪化して、苦痛をとまなう労働が相応の対価を伴わないばかりか、それ自体が特定の階級を貧困にするのみならず、人類の破滅にもつながるほどのものになっている。そう考えたとき、20世紀を経てもはや「労働者階級」としての存在すら失った「チャヴ」が自らの「労働」の意義を、日常の閉塞感を打破し社会を変えることそのものに見いだしているのは、まさに19世紀末の問題意識の再来でもありつつも、同時に、単純な社会階梯の上昇がこの問題を解決しなかった経験を踏まえた、きわめて21世紀的な筋書きと言えるのかもしれない。

IV おわりに

本稿で十全に取りあつかえているとはいいがたいが、『キングスマン』自体はコミックを原作として世界を救うヒーローを生みだしているにもかかわらず、マシュー・ヴォーンが述べているようにノーラン作品へのアンチテーゼを含んでおり、社会との関わり方という意味ではスーパーヒーローものには該当しない。これだけを見て「チャヴ」のフィクションにおける表象の意義を語るのは早計にすぎるけれども、近年スーパーヒーローの条件として規定されるようになってきた、自分自身の問題のためではなく社会のために奉仕するという特質 (Rosenberg and Coogan eds., *What is a Superhero?* 25) は、あまりにシリアスであり、ヴォーンの指摘するとおり、世界が良い状態であるという前提において—というよりは、社会が奉仕する価値のあるものだ—と信じる場合にのみ—有効なのだろう。

エグジーが、ジェイムズ・ボンドのように美女を獲得するシーンも存在するとはいえ（そして彼女が立身出世者ものの常らしく貴人であるとはいえ）、様々な要因によって貧困や複雑な家庭環境に置かれた人々が、ノブレス・オブリージュを伴うまでのステータスの上昇ではなく、あくまでも個人的な生活の保全をめざした結果、ようやく最後の最後に家族を救うことができるのだというのは、「下層」の人々の苦境を示している。同時に、チャヴ仲間を紳士がなぎ倒したのをきっかけにその集団から脱したエグジーが、後日これを完膚なきまでに模倣することになるのは、チャヴへの蔑視が出口の見えない社会問題として再生産される現在を裏付けるものである。ヴィクトリア時代後期に生産された種々のワーキング・フィクションが提起してきた「労働」の価値の問題が、いまここに再び提起されることで、悪魔化されてしまった労働者階級としての議論がはじまった「チャヴ」たちのリアリティが、すくなくともフィクションの中では多面的に描かれ、社会憎悪の解消につながることを期待したい。

参考文献

〈映画〉

Vaughn, Matthew, director. *Kick-Ass*. Universal, 2010.

---. *Kingsman: The Secret Service*. 20th Century Fox, 2015.

Ritchie, Guy, director. *King Arthur: Legend of the Sword*. Warner Bros, 2017.

〈Web 記事〉

Lawson, Richard. "Review: Kingsman Is Crazy Violent, and Endlessly Entertaining." *HWD*, Vanity Fair, 12 Feb. 2015, www.vanityfair.com/hollywood/2015/02/kingsman-the-secret-service-review. Accessed 13 Feb. 2018.

Ostler, Catherine. "As Romeo Beckham stars in their new ad, how Burberry went from chic to chav to chic again." *Daily Mail Online*, Associated Newspapers, 5 Nov. 2014,

www.dailymail.co.uk/femail/article-2822546/As-Romeo-Beckham-stars-new-ad-Burberry-went-chic-chav-chic-again.html. Accessed 13 February 2018.

Shepherd, Jack. "Matthew Vaughn interview: 'When the world's bad, people need to be uplifted'." *The Independent*, Independent Digital News and Media, 25 Sept. 2017, www.independent.co.uk/arts-entertainment/films/features/matthew-vaughn-kingsman-2-the-golden-circle-fantastic-four-guy-ritchie-layer-cake-a7966731.html. Accessed 13 February 2018.

Walter, Barnaby. "Kingsman actor Taron Egerton says calling people a 'chav' is offensive and is equivalent to homophobia." *The National Student*, The Edge: The University of Southampton's entertainment magazine, 30 Jan. 2015, www.thenationalstudent.com/Film/2015-01-30/Kingsman_actor_Taron_Egerton_says_calling_people_a_chav_is_offensive_and_is_equivalent_to_homophobia.html. Accessed 13 February 2018.

〈書籍・データベース〉

Oxford English Dictionary Online. <http://www.oed.com>

Lesjak, Carolyn. *Working Fictions: A Genealogy of the Victorian Novel*. Durham: Duke UP, 2006.

London, Jack. *The People of the Abyss*. Cambridge: Cambridge UP, 2013.

McLaughlin, Joseph. *Writing the Urban Jungle: Reading Empire in London from Doyle to Eliot*. Charlottesville: UP of Virginia, 2000.

Rosenberg, Robin S., and Peter Coogan, eds. *What is a superhero?* Oxford: Oxford UP, 2013.
ジョーンズ、オーウェン『チャヴー弱者を敵視する社会』依田卓巳訳、海と月社、2017年。